萱文製錦

秋冬

二

鑑文藻錦二卷目錄

秋部

初秋一　秋風二　萩三
薄四　露四　秋前栽
秋雨十二　雁四　虫十三
菊廿三　紅葉廿四　野分廿五
暮秋廿六　九月盡廿七　秋雜四

冬部

初冬廿八　時雨廿八　落葉廿九
千鳥四十一　豐明節會四　霜四
紙代五十　鷹狩四　霰四十二
冬梅五十一　冬雜四　雲四

朝貝四　女郎花五
秋野十　秋夕十一
霧十五　月十七
秋霜廿七　秋夜四
冬月四十

紫文製錦二巻

安藝　源　稲彦　撰

秋部

初秋

萩に露のぞすぐしくふるいでぬ
秋にこそ
ぬぎ
ぬ
ぬ
ぬ

こて行ふ。

○又六日(四三一才)は夕月夜さすがにいりくぢなどいと
もうもけしきぶかく萩は音もやうやうこのあきもし
るほどに秋のなりゆくなり。

○ちとせるふ(夕景四一才)のきみちかねどまたなどさしの
をやまのいろはどもそるいちはやしねど秋
は家ぢにはきくの花のみぞ秋
家ぬるをるほ紅葉もけうこもあきりてず見
ゆるやうにいろ紫づきもゆふあるまるよに

去りて。ものうそもるしどあてたこのるは岳
るり行つり。

○椎木(ナキウ)は枯すまじりたるぬ秋はいろ球青羽
は山ちゅく。風はれるもいとしやこのみ椎は
やるぐそわぢのるえぢきく。松まぢのき
たるるよしまのうめぢうれしぼゆるを。文
をまいくまいよりえぬちよるうびきま、
えちあひて世度をぬぼうぢ松ぢり。
いとはぼく軒行ふ。

○すゞしくなりぬとて、やうやうに家〳〵せゝ
ひるのむさきもれぞ、ぬけさり紅葉せ、ゝ
鬼ぞ、んこゝろなどわのき人ぞ、に
かりくみしはるゝ、ひまもるつゆ水
まなれ月をめでゝ浮あうじたしずゝ
よりそ、いまめのーけまぞこれみやぐか
るすぢそ、ことゝまくそてそや行ふ。

秋風

秋風谷より吹ふきてふ

もゞさむさにぞ、

萩

時雨うちして萩はのぜ元ぞ、るゝぬ

夕暮に、云〳〵

朝貞

たのしぶるゝ待ふしひわはのずゞこれま
しゝ。ときめきたるぞ、ぬきすゝ夢
けゞよ花はなるとゝ、ぞ、あとくあ。ぞのしは
もゝくゝ家る

なり。

○ゆく春（七十才）

みそらしますゆくせ行ひく。あさぎりを
なごめ行ふかまとる花どくもれ中にあさが
ほはつまとこのこの花どくもれ中にあさが
きこのにせ法くるはひまれそもくあるし
らせ行しくく春を行ふ。

○ちるまよりそやどてまどろまぬあの一枝
つるあ一たるよ。雪はまのがさよりう花はもく。
（宿木十五ウ）

むそーちくみ見てわらみ中にあさ白ぼう

なすもにくまたるを。ものをまるこちらし行ふ。
はしまるきをなるがこちらぐ
るきしはのりのらえあけまるがらぶと
りそめにちふ行あのし行へを。
此ちしはのひくるまをもまをひとりは
みで見行ひらる。

○そり行つる花をあざにうちはきて見
（口六十ウ）
ぬたまつるこが。やとあのみをくゆくを。

あさ白いかなかき
花のおうれ時明
るまをさけてうはの
ひとり。

中くいろあるもちひだすうらみゆもしぞや
をゝさゝいふしく。
葉君
よろゝへてぞみるべうゝる白雪はちぐさ
のはなゝゝ朝がほの花ごとゝびてゝゝ
えてかなきぬにゝ雪をはたゝきぐそたまう
ゝるものゝしはゝゝゝ思ふてはたしはゞら。
かゝる雪ゝゝるものはぞ。
中君
さゝぬるたかをぬる花のはのしさるはく
ゝ雪をはゞぐまゝ
可行不詩
ゝゝはにこうまゝ

いとおもひびくゝたゝとそはゝゝ久びゝはゝゝまゝ
にゝびゝゝゝち紛つるもゝゝなゝゝゝゝゝゝゝゝ
紛つるこのゝゝとゝはそゝまゝゝゝゝゝゝゝ。
大君ゝゝし其君の人
女郎花
千 習廿六丁オ
ゝゝちのさをみゝゝゝをゝゝゝゝゝゝ
はゝゝゝとくちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
薄
宮本七十二丁オ
かゝゝなる前栽の中にをゝしのゝゝゝ
ゝいとゝゝ手をさゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。

凡ゆるにぎやかさうでさーたるそ。爾をつら
ぬきゆるるまれをぞ。ぞのれぐるうちかすび
さたるれど。例はけとなまでど。夕風まほあ
はまるるころ。ゆりうのし。

白芙 ほるいでぬそれたそ。おしきれ薄まるく
たそとれ。爾ちげくくく。そのぐられは。冬ゆう。

露

神七十四 あけゆくくくそ。ーたるくでいで行ふみち
れぼどいと。爾けー。

秋前栽

柯蓋十五十四 おまへけゆぼせんざいのいとおそきころまれ
かりゆるを。行らむずるやうにくしけびや
ふに。心にくきこの折れ女房。ほ人さうろ
はせ語ひて。行そのぐりせ。ぞたまふる
ゆり。

夕貞廿三十四 〇月たくるほどるだきたるすんそ。のしまでの
らあけてまふ。とうてあしかく。人めえしく。
はぐゆ。見わてれて。ぐちとらあま

しくぞのうりさうぢのさこ早木ぞ。
あるよ見人所なくみは秋れのいにくぞそ
みくたにうぐいすまだ。源氏君月
ゆかしくる所のしべちかしめうこにぞざし
ねぐーてハ高ぬべのあれぞ。まろさは
きまたりぜうさくそなりよりるかろ
ぞうりくそ鬼はぞそ。音をぞ見ゆる
てんとのうまふ。
○夕蓋（夕負四十五十ウ）
ぜうりくそ。めろーきぞ

あはれ。おもれまへれ前栽。うまくよぜーよま
そのさこかまて。そみぢけやとも色ぞくなど。
あにのさたるやうにぞれそーろさは見ん波
して。ゆうよりほのみ。れ。ーきまどらへのほと。
この乃夕ぞのほのやどりを。名ひいぢるもそりの。
行れ中にぶへはさてふ鳥せ。ふくかれく
を。きー弱ぬて。の。源氏君月のしのあーー流ぞこけそりるる
きーー此。つくれ。源氏のこ
ろーー思ひまりーーさ五れ。
たそのぞにぶ。ろたく。れそほーいでらるし

ぶし。元ゝ

〇前栽(須ナ世四ヰオ)の花。いろ〳〵さまざまに。松そ。ゝ。

苦に海みやらるゝ郎女(源氏君)のおもてだゝずみ竹。

〇そのゝどそ。(松風 廿三ヰウ)(たゝきのし)

にゝ。のゝ。ぢ。さて。高ゝ。てま

ぢ。ちまぢ。つたるそ。前栽入花を見てまぢ

ひたる。いろ。あひ。ひ。ぢ。さるめで。そ。

〇中うゑ(野分 三ヰオ)ねまに。ぬれ花を。撫させ行へる。

ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。草ぢつ

くゝてよ。ゝ。ある。くゝ。ぢ。あの。木ぢ。ま。ぢを

少ひまぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。

○ひんぐ（貧乏）れきいのみしらすぐばかりにて御
前（三へ）の球（きう）鬼（おに）やりまくるぞみつこしまつ
うりあけくぼのうるあさぼらきはど
にみきまきあげくへこあまりがうらん
ふえだ（二の）つくわのやのる限（かぎり）あまこ
うちとけてきぬのめんさやのるぬあ
けぐれかれなどいろくるすごきぐ
かくれのわくだらさものてぬれこ
ぐそにかのこのはや紙ふかりうり球（たま）ゆで

しこれぬきうらきあこあどそなをこ風つの
かざみみどくやれてきにあしまるきまに
てぼを人ばのりたるくこれこさ
むくよりていろくれどそそさる
よひなでしこ泥ぬしあはしみぎ
えぐとそぐうきまるきりれまるし鬼
いとくえんこぐ鬼てける吹くる近ねきぐ
うれのにぬとるみ白ふのうれのきりそぬし
きひあくる御（おん）けきひまやいとたきひやめ

でたく。じげさこうせきてたらづでふくはま
ぜ。ゑびやをのよう。うちはるまじくあゆとこで
紅つるよ。へこけぜやのにだどうさこがはよ
ちあゝねどみかしすづりいりぬ。
○せんざいどそなどがちひさき木どもをうゑし
藤裏葉廿二ウ
そいとーげさこのぎおなりひとむ落ち。
ムはまの女てみぐしをうるだくろはせ紅
ふやり水はこくさをかさあたあてうらん
ゆきたるまーさ紅り。

○九

○秋風すれどもいどけまへいの東れ
敏虫七ウ
さはをれ。まべくに畳にたくせ紅つりあの
れたるしはどーてうれすたーしはさを紅つる御
赤ひはどいとなるあきたり。
東屋廿六ウ
○さいはけられるのれたぜんざいれとと
のうう。多くにさ北みぐ花るにやり水乃
わるれいたこのさはどうれのし多ば。
はちくうひあてなぐ紅り紅り。
手習廿三ウ
○かきはるよう。忘たる形でーこそだをろ

くもをうかべつゝ。さくやうにぬれて咲きそめる
に。色こゝろすりぶぬすゞのるれをものこゝろ。わ
ゐさあまこゝてさみをおりぶ（樂）さらぶく（東）
まて。みゆみたきてゐよしすゑたしかぞう
ちゐこゝめてゐるもより。

秋野

（柳三丁ウ）はるゝくさ野をもわあいうまかうゝとそのあ
ちしかなりゝ秋はしゝゐはしゝゐはるゝへゝ。あきぢ
ゐばゝこゝそのまくくるる出はさに。松風すゞ

くゝ吹あはせくゝ。ろれゝとくこゝ。（第六ニ三ウ）わのくゐしぬは
ゐゝよ。そのくゐゐゝそゝこゝきくくたるゝと
えんゐり。

○よゝ（松風集ヲ徹氏君の大井におまるを頭中将ゐゝ秋に家ヲのひてゐるゐ泊し）月よくくちをゝう邦。（ゐ）とゝこゝしゐくま）侍
ゐ京ゐるゝゝゝゝひゐ（へ）ゐれゝ。のゝゝゝくさ蕭城わあ
て。まゐり侍る。山はすゝきまゝゝゝ月侍ゐゐ。
聖ゐはゐゝゐゝゝゐゝに侍ゐれゝゐるゝゝはあ
ゝもゐのゝこゝゝのゝにかゝゝゝゝくゝ。たゝゐくき侍
ゐ京ゐゐ。のゝゐりぬんゐゝゝ。

日廿一下オ
○墨にかくまりぬるさみせちこがりもゆ
ばりりつはけを出るをさけるどはどつと
にさしてまるまり。

秋夕

横笛七下ウ
秋はゆふべはそのあはしかるる。落葉文し
はたをひやりさそひ夕雁君し行ひくわりもつり。つち
じけしめやうにこは寒ゆどそしかどひさたまふは
じしかるべし。

晴物五十五下オ
○ひんがはのうらんみ。行墨君のこ
とくゆ冬のぼに

大底四時心物苦。
就中腸斷是秋天。

ふるまるみぶ花はひそひくく。御前草村を凡
日もすゑ行ふゑ。ものみ衣なるゆ。ふのたつ
いろはわるまたゆる秋はてをいふこゆを。
いとしはびやのゆずんはくゆまり。

雨

晴雲廿九一ウ
秋はあめいしもをたるまれ前栽の。
いろくみぞもたるはゆはしはきにぶいの
はとぐそのさはぶあはがいでらしかく御袖
をぬしはは。女御中文し御のこにわるもり。

○野分ハ十月 あの野分ごとに風さこそ吹めりてぞ女
はやうにふりいでぬ。
○霜月ばかりよこさるあめぞ。ひやこのに吹
いる。雲はやくすごきに。元〜

雁

浜ノ世四十ウ
はこさより。舟ぶねもはつるひはてしアとこぎ
ゆくあどもきこゆ。ほのうるたづちひさ北島
はうこぐるゆ。みやらるえ。ぶぶうげるる
に。のりはてぬなく声。のぢはるにまぎの
つるをうちなすごめ行しく。俗間はこぶる
を。のきはしひ行つる御まはさくろきこ乃
御ぞよそしまつる者。故はは女ろひさ人
くはころみはれまぐさみくり。りの夜の比八冬ニ
○同ぞしいでくそなきぞるたまうちか
ち雁ぞ。ものをはるまこぬ。落葉ニ入れの中を夕音
君はぐひもちぞ
くさたまふ。風のちさもくれ
あちしかあるて。さそはまこ。きはは琴をいは
はのこに。落葉ニ
はしの行つるもぞはくふこのき声

かるふしぶし心とまりはすれ。ほのぐらき
ほゆしぞ。琴琵琶をとりよせ。いとなつかしき
音して。想夫恋をしらべたまふ。

虫

桐壺十四ウ
月もさしいりぬ。入りぬ。
いと涼しく吹て。草村むしもうらぶれ
ほうがはかりをもいとたちそるるかるたぶ
そとなり。

令婦
すだれ巻たるのざまを。たくしてをなぎ

歌あるのずふるふみだいのは

〇風鈴(ヒイオ)

たるこゑそ。ふるさとの。はるるをもさしてれ
そふことなのさいるさくすぐ。ぐるみ

明石世ウ
〇三昧堂ちのくてのもみぢ。松虫のなびき
あひく物このまうさるまいの
ねぎ。そ。いぶ。あるまの。前栽ども
にぬ。ぬ。とをけくそ。

横笛八ウ
〇うちあしらそるこちすまで。あてるとこ

くすこの一行ひく前栽の花ども。虫の
しげき野辺をみづからもとるものとも見え
わく一行ふ。
○こゝ人間に虫どもさまゝ色めひく風すこ
し冷しくなりゆく夕ぐもに。わつり行ひて。
むしのすをさて行ふやうにぶく。
○げハ下ゥ。ゆえもとる亦にずぶもしのつゆ出
たるほどぶるやのにたのしぶれたれく多い
げしおとるこゝ亦にれたれるんすぐしれるこ

てゆえもとるけを野べをわくくぶわ
ざと尋さうきそ。ぶるこせなへるしるくしなき
けくふるこうすくかくまたづひて。
今ほどぶるかきもしるべきに
まこのせくぶ人きのぬれくやまるけれ
のまゝぶるる色をもぬそいとへまて
ムあるぶむしるんるけるすぶもしやい
くぶまくくるくらたくしるどのくま
ぎぶくや。

大方は秋をぞうーさきうすをうすく
かゞ紅すゞむ山は色ゞーはじやこのこゝまぶ
ゆをあまめいろあてるおほさこのかう。

霧

夕月サニテオ
うけわうちうちのそ何ゞーは淀ゞたちまー
ちきて。あゞうめーいがるほゞあをゝ
かゞゞのーのゞぐさもバうて見あげもたる
たゞしくしなくぐらしゞさうえうく分け
きに。すゞしをさくあげ行へまゞ御神(オミ)を

いきうぬまに行。
賢太十二ウ
○雲いくうあくたゞまぬあきけふ
ちはゞうめくゞひとりぐちかたす。
浜武君
行方をはるかのめえやらむ此秋をあ坂山を
きうしはゞてうそ。
松風十二オ
○むこの山人えゞ氣さいひ行る浦は朔ぎうゞだ
きうゆくあくにゞとえはの行くて入えハ
人すこうちはまゞくあくゞまてくなゞの見
ゐきう。

夕清 八十オ
〇さくらは木ぬれ此軒はをしまで雪ちわくしも
ぞ。おこのでむ。うくそ見てぞ分るゆくそいのば
まべ。さとく。

夕方月 山里は雪をふる夕ぞりにはそらいでん元
元なのこさこくちらして。

橋 版十丁オ
〇峯は雪はるまをかくてあのしく
らし給ふよ。云々

口ハ十オ
〇かはしもぞ雪はうもはれ色のすうる
きこくうくだちるもろ。

孫はやへ雲。れ木ひやるへぞてれほくあれ
なくるよ。云々

総角 廿三丁ウ
〇あけぐまはどあやにくはまこうわくて
京はけもひ。那やこうかるみ月をうる
つぶてらまくく木はもこえくくなのまま
こさまとう。

月

桐壺 十二オ
やみよくまくくう行るほどよ
元たこのくうう。暗ふにしどあしかまるこく

ちーて月このぶんのぶんうぶでやくもぐーるこそ
さんぱーぶさーぶ　一人まとる。
未掛花十四テウ
○月やうーー出くーあまるまるのきれこぶぶう
とまーくうちれぶあ行ふぶきんうーけぶぶき
まくーぶぶのうのにぶのきーしし行ふぶぶーー
うきあーぶぶ。
貝木世ニテウ
○ぶる月やうーくきいぶーれのーきぶぶな
るーあそぶ月ぶぶーぶぶるまるきぶぶかれ花
ぶ行きぶ。

○十七

三五夜中新月色
二千里外故人心。

あーー秋の月と花
ことを同じくーーーーー
きーん人まるもぶ。

○月ぶいとぶるやのにぶ出まるぶこよし
きぶ十ぶ秋なりうぶたぶぶ出て戴上乃
れあそぶーーーー

これをながらみまくるまつりの月のあるまに
まげこむしき人は御(オミ)さえ成だれをしいでさて
あふぎくくうまひきすぐてれをつきぬ
べくれぼ歩。

源氏君 れをよのいたきまに駒よ者ふるくれかに
のうまき時のまえんむとれひとうぐち折ふ。
口世一丁オ
○むすめ紀すますたくるのつまんこるよみがき
て月いまきまるあきれたぐちぐしまぼのり
れうあけまきり。

○十五丁オ
○十六れ月だをーろうしぐすのるゆ昔
れくこのきこさくぐーー完ーー出ーまてくえほこ
れきを行ふ。ふこのむぼるくれぐばきるすのるべ。
松風廿一丁オ
○をりにあくしのひきるてうし吹(ヒキ)ちるほど川
風ふきあはせくれをーろきよ月たのく
きーあぐのうよろぐのとすあるれれやい
ふくるほぐ敬上人ぼる人ぼうりけを。
まるれうり。
常夏八丁方
○れれ秋れ月をすぐーー巳ほどぐとれくよの

くさあーで。虫は色ふかきなりしあいせたるほ
ぶくろかついまのあうーきまのねのうり。
藤袴十六丁オ
○月はあのきの秋。のぶーはのげみかくまてこその
ーし行つう。
横笛十二丁ウ
○ふけ夜に。ゐぶのあきてかくねんぶろ
落葉六丁ウ
ぶりきこーー行ふぶるど人はきこーきーせけ
もきーかやうに。秋はのーー行ふもなのまにくて。
入たまのをもきくーねるやうにて。そのし
行ふれるべーー秋と君 催馬楽の紅葉の沼し
と。いるさはやまのの色

きのうてひどりぶちうーひてこはれ
そがくきーのーーあるあるれや。今秋の
月をのぬきもありそうとうめき行ふか
うしあけさせ行うてすまきあげるど
行ひくーぱーちのくーー行つうかるる秋月
にむやきくーめみる人ちあるそのすこし
いで行へあれはんうるどきこーー行どらやは
う行てそひくーきちのび行ふ。
鈴虫九丁ウ
○月きーいでくーらとはのやこのるるほどーそ。秋

なるまゝ式うちかゞめて世中さまし
てつけ〳〵はのかくうちのはるあうさ月
それぼ〳〵はぐはけまて彼よう元あさま
まるねもの きまし行ふ。
○月 みるよひのはてて元のあたれまる
（ロ十十ウ）
ぬとりきなきまに出よしのあるはる月
はを色まこげまる行わが世はまでこそよ
うしぐれまひなのさるゝ。
○月 あこゞ。ふけある元面白き
（ロ十二十オ）

にわのきくぶ笛はどわどとかく。ふる世行ひ
かゝりて。遊びまする清まりはさるかり。
（ハ十八十オ）
○みちすがら元式かのめて中三日
月。いと花やのたさ出めしまを。をぐれ
山もたゞかるまうれたるて。一条はしあ
みちかりうゞ。ひどうちあぐ。ひたし
さるはるのはぐたるをみつるまゞはるく
ゆかわこあく。ひとのゞ元見て。月
はゞやり水はれたまてをあ。はるぶさ

たゝに。大納言(おほなごん)。紅葉(もみぢ)。ゝゝ。あそび。ゝ。行ひ。
をもしろくを思出(おもいで)行ふ。
夕雲君(ゆうくもきみ)
見し人はすぎぬ過ぬ池水のひとりやどる
ある秋のよの月。
橘坐十少
○うちながめる人ひとりをばらまぶしかる
くれく。琵琶をまくれば。ぢち。琴
さゝりに。行くゝ。雲のうへ。
月はまるものにぞ。あのくぐ。出そめ。
大君(おほきみ)
扇なるべし。月ちゝ。

まよ。きゝ。まのすゝの
歌あくべしらの説

ゆく。帥(そつ)。こゝ。
らゝ。ゝ。ゝ。
八重小樽にゝゆ。

けゝ。ぐ。ゝ。ゝ。ぐ。ゝ。ぐ。ゝ。ぐ

つゆ〜さそ紅ぎぶつと新に高てのうらてはう。
○入り（雅本十三丁ウ）お月さまのあかるさ。ぐ〜ずさ。のぐ
かなものあのうきに君がらもてはくまうてはたび。
○こずまへ丈前（角絵廿二丁ウ）載。ぼうれるを紅ずはなのぐき花
丈すぐうを。本草せまびきざるえ。ごとうえん
うさきて〜ぐやり水をすある月丈のぎさへ。色
しうきたるやうなるてぎ〜
○十六日月（雅本廿四丁オ）やうきてあがうまるぐ。
○ら〜ぬ（ウ中君の花し）ぎ紅ぎうみさまえ紅ぎすてっぐ。

べきこ〜ら〜をせぐ。ぐはーしけれぎよりつぼ〜
ちぎうけぐ。ぐしぐさあのはてえつとえに月を
あぐのめく。ぐはそするぼどかうう。
○けまれ（ハせセ丁オ）をてれあはくすこと。此こ〜をみ
紅へぐいのぐ。ぐのぎをそ〜ぐこのぐまてきあ。
さんとおえうこんるひとうるまをあしぐ。ぐ
あのーぐかうきのくよ紅ぐ丈紅ぐあはた。
こ丈ぎ紅ぐ丈をすぐ。ぐんぐやうまてく紅ぐる。
れどっぐひまぐぐーてぐうぐ紅ぐ。

○晴雪五十一 六十四 廿一 ゆるさぬあるにわづらを妨ひけり

ぞ人〻月みるとくこと妨るる歟ようち上

けく物ずうするほどゆるるる。

菊

九月まるまる九日わづらひわるるさく成

御らむじく。

伊勢君 ひとりたきあり菊に物言ひひとり

宿木七十四 ○業はまぐまうらひてわざわ

不是花中偏愛菊 此花開後更無花

名まの分かし 都より井ゐひとくるとずーあひて物すぐれ

みこれの弟ぬでわる名ぞ。いと一を

人はうもありてびらはまを一けるを物る

ぞとをぬ。ぬをてくゆりわるる花を。拾うしぬ。

とく御 十君の歌 ちら郷 とくだ

して。云〻

紅葉

貫木廿九丁ウ

紅葉はやうく色づきわたりて、秋のはつかぜに、
はらはらめきちるはどんまひ、ふるさとをそわび
きぬべくたばまる。

○山はもとつ世もとまりし紅葉ばまれ
ゴ
ふかくもぶくらぶまでとたそめまし、ける
うりはくろくそみちくしがてこ、

少女五十九丁オ

○九月まつ、紅葉もとく色付くうみれ
ばもとつ世もとまりし風おいかぜ

夕暮に沈(ヲチル)ものこれ、ちる色ふれ花紅葉をこそ
まぜくこ、ばかりに奉らせ給へ。

角総廿一丁オ

○秋はけ、きそもとつ世もとまりしあをき枝のか
ぎりもきぐしくこそ紅葉しそめる枝。

蓋名

おほ、ぜ、えをわきてうめふる山姫さいぜ
のさえをやはたそ

○此ふる雨はけ、急きこそとおもへ、ゆ、
ふるさはぎにやうひすぎにける萬葉をまどそ
あこのぎこ見てこ、ぞ、すこ、ぞ、

○かなめ（手習君にこころをかけさせ）たんさく。その一さとうゐる
色。葉はいとれそ。ろくぼのけくまなるに。
深まし。さる名。くるまで入りくるようで。その
あるしまりける。

野分

野分ニテウ

こは花の色まさるべし。さどを色かへむずる
に。聖分きいのうしろ。そどろくしく。
は色よりりてふさいなどもしをる
をつとも。思ひもまぬ人ぞ。あれわ

天子にたれほうびの
ぬの。袖もぬれと

天皇はたれ。ものもあれ
小萩。なにをかこちけん

ア。なれ。たをひさわ。ぐるる。枝。おのして。草むら。はな
乃。玉は緒。みだるるまに。陣人。まさもと。ぬる。
くれがし。ものより。れほ。ふばこのりは。袖。秋。ろう
にし。ものこころ。ばし。げりりくし。かくまに。
花の。もんぐ。ぐ。咲。まはしく。ぐ。ぐ。むくは。
けしだ。みのうしなだ。まぬりぬるに。うしろめ。
くいみだと。花乃。うえをたぼしなげくみなみ
は。たとぐに。花。前栽。くろは。せ。弱ひ。るをり
し。花。く。咲。いぐ。ものあ。れ。小萩。ぞ。たれ

まるもの。ぐも君さこ
すきて。

くもちえることる風むらーきるう。をしれのつう。あ
まとまるまーどうぶきちらしをすてーはーちか
う鳥ん弱事。

同九丁オ
○やまけさどえ、吹なびかーてえでこどえ。おほ
くもきまふーさう鼻むーさらに先いも
ぶ。ひえぶかはら。変くれさてどみ。すいの 透垣
へかしどやうけえのみぐりがちー。日けわだのに。
さー出さるに。うれひがほなる庭け房。き
らぶーとーて。空さ。いすごうきりわくれ

陰にのえ〜

秋霜

藤裕七八十四
九月に先なりぬ。ちーえむすぼ。ま。えむ
かるあーさに。えー

秋夜

未摘花十四丁オ
八月ゆよ日。よひすくるまでまさる月けて
ろえとなさにぼーけ光ぞのうきやけく。松ろと
ぶるるぶ。ふくうぜけれとどーろぼくくで。よーー
けこけ。かーりいぐ。うちなきなどーー弱事。

○紙屋川十三ウ
秋は萩の葉のもちひそ。かくらぬ所ごとにおちぶれぬ
からあはしれわたるをまして嵐ふき山風ふき
ごとにそれ出たるこころぼそげなのこさてわくさる。
○手習世九ウ
ゆふぐれの雲のぜれたとえあはきなるこ風ひ
いたるこよたたぼくて。
浮舟
人に出て秋夕をわのねどもなごのむる袖に
雨ぞ降ぞと月さいでて松のこさほども。
ひるふみあり。中将ねそ。

暮秋

○井上

○源氏十二オ
九月ふなりぬ山ねろしいとはぐうぶ木は葉
はかくろへなく成りてよろぼのこといとゆ
さほどなまぞ。
○四十四ウ
○九月十よ日。堅山の今さはぶのくらぬ
人ぞにたぐ色ぞはぼる。山風ふきぬ木
くれ木末ぞ。峯はくぞはこころひわくに
うぶ。そひちるまぞれよ。ふとさぶ経
の聲うすに。念仏なぞれこ。ぼのして。

人はけものひいとすくなう木がしの吹たち
ひさるに。鹿もたぐるまの花乃末とにたくぎみ
はく。山田のひさ(板)きまをおとろの丈そこきくね
どもはれ中にまぐ乃てうちかくまうきひの屋
なり。離れく多もそ、とぐこを乃たもの人をだれど
ろのしがほよみかしがまーうどぐろきひ
びく。草村乃むしーろくぐより所なげよ。ゆさ
よわりてのまたるくさはもさようあんぐろれ
われひとりはくぐ。なぐうもひいで。ありけく

見ゆるなどうしかまいはこのごろのとなまぐ
なりかう変のうるやいと考へぐこ地ぼとれ
物ごのしーさな祭。
○五明乃月乃ぐまぐ(橋姫十七行オ)ぐ乃ぐくさ出るほど
にぐぐたちてぐいとものびてもと(オモン)にに人なぐ
をなくやはきてたをーけあ河はくるこか
きまぐ。舟あどきわぐくをで馬(ウマ)てなりけ
あ。いりもてゆくまくにさうあこがりてみちも
見てしぬ。ちげ木はを中をわけ行者ぐ。いとあ

らまーさのせのきほひよぼろくとたちみぞ
るくこれをの家のちりかゝるをいとひやかよ。
ひとやまあぶらくぬしまもひぬこのし
ほありきあどををさくあゝひ弦ちぬこ
ちらにぐらろぼそくだうしくはぐさしれり。

黄君

山おろしにまへぬとれをの家よりをあや
かくもろをを吾なみぐのれ。

総角五十三オウ

○九月十日れほどおしかをで野山のくきをだ
をひやらるをしぐしめきくがきくしぐ宣

乃むら雲ぐだうろーげかるタぐれ宮いとで
ちぐろろちおくなごめ弦ひてでいのにせんれ。

宿木六十五オ

行ろろひとををいでまちかねたるふを
ヲ。おーはうてまるり弦了。

黄君

○宇治のうやををくーうみ弦をぬとををい
をでむのーとはくかるこちしてすぐろにん
ぼそけしれぐなごの月かよ日れやどにれをし
をちうぐどしーくぐ風のを吹をうひてころす
ごう。あるまーげかる水のれとろをやどを

つとにて。人かぞへこと。に月てゝ。ぬ。みるにまぎ
かゝさくらし。かなゝ。こゝとぞ。かゞりかさ。

九月盡

国屋三十オ

九月はごもつとゝまだ。紅葉乃色ゝこゝきま
せ。霜のれ乃草。むゝくたのゝう見てわる
はに。ゝえし

角総五十四オ

○あめひやこのに。打てゝぞく。秋ちつるゝ
されすごきにゝえゝ

秋　雑

をとこゝくすごろぐて。門ちのきらられす
乃こだはたのに。ちりかぞて。とぼり月をみる。
菊ゝを面白くうはろひわゝりて。うぜはきほ
へはゝ丸みぐちれみぐしれおどぬちしとげはみて
ありふとゝろかる笛ぞりゝでゝふきあし
笛ゝ

催馬楽のうたし

ゝをよゝふどはぐゝアとうこふほどにゝよく
なる和琴を。ちゝべとこのへきりけるを。う
はちしくかきあはせるりしほど。ゝうを
ゝうゝぐかゝ。

律

アちれちゝべを。女はをのやちら

（はいきぬ紅葉は宿にうりきぬぞこゝつゝ
わけてどゝ人もたぬ）

かに。このさきあしてすまたらすりさこゝ考る
夏。今めさきとる夏れこゝ考かしぞ。きよく
すめる月ぞ。をりはきぶこゝ涙。をとこい
さくめで。考れをとにあゆこゝて。庭乃を
みぢゝろ。ふうわけ考るあとをかけしな
ゞねさま涙。さくを、見て、

殿上人
琴は音も月もうたゝ寝宿なゞらはた
し。なをこゝ人をひきやとめける。殿上人詞わろのめぶど
いひゝ。今ひとゝ考こゝはや考べこゝ人のこゝる
とゝにてしかこゝ。ぶどいゝくあゞこゝを
かしぞ。女いこゝ考こゝ考にくろひく。

木枯のしに吹あは考めるゆ由れねをひこゝ
とゞむべこゝ言乃をゞかこゝと月まめこゝかは
考にこゝ

○八月十五夜（タ点十八十ウ）

かるゝや。殘乃なく考りこゝてゞんゞひ弦
ちぬすまひれこゝるもめゞしこゝ。曉ちの
くゝ乃にけるゞゞとなりれ家ゞあやし

きさきだのをれ〳〵ゑくぼさま〳〵であれいと
やさしゝやことゝ〳〵ゝうちりそひるをだのむ所
すくなくなるなこのれのよひあだもひのなぬ
ぎぶとんぼろなれるどのゝうさてゆゑ。
などいひのきにもさこゆいとム衣なるれの
ごもこのいとかゝにたきいでゝぐめさわぐ
こもばどなさを。女いとをづゝく思ひより。
日十九丁ウ
○ちゝくの表うけきぬるれ書もこのゝこのに、
こかゝこのれしきゝわゝされ空とぶゝうれ色。

とりあけめてもれびかゝきことたはるりぼし
ちゝのゝこにすゝあ一所ゝのりゝれがやつ戸をひきあ
け張ひゝくまゝゝとまに見ゝぶゝあゝほゝこのゝこに
もにゝれ書るゝれ弁。前栽の家ゝゝなゝほのゝ
ゝ所まれかゝじゝをゝゝらめゝゝゝゝゝゝゝ
みゝりゝのゝしゝくゝかゝゝなのれゝるゝゝゝゝに。
まゝほゝ家ゝゝゝひゝへゝる御みゝゝまゝあて
たるやうにゝなゝきゝみゝゝるゝをゝ弁ゝゝまゝかゝ
れゝばゝゝるゝ表ゝゝゝゝゝゝゝ

いとゞそのはたらきもなるべくなめらかなるこゝちしてゆかしひとある。この月秋風まづぐて出ぬれども海のうへを見ぐるに入道きいのご殿よりふのうたさてばねゝるに入道きいのご殿よりふのうたさてばなまくつもうちしてだこなひいまもうぐいみじうといみまくだたまもくいとものびのゝ。

○おほかたはもなのきほどまれもれ音なひ（撞七ヲオ）につまてきすぎにしまの〻衣ゝうつ

○秋の比ほひ（われ七ヲウ）

うれかなりく。だのうくもゝ衣ゝまもふのく見てあひれいとゞへかどまも思ひいでさこてさい。

○夕風（後裏葉廿八ヲオ）

ちきたる。渡殿（ワタドノ）の上見上げふ殿の面ゝかさちおりきわゝらべやむどとなのき家れゝなどにゝ。あまをさあのさもゝまもさすわうこびなど波（ヅメ）大など。常のごと例のこゝぐゝゝひこひだかりみけしきを見せて。みごのきまのどもはほのかにまひけい。紅葉は後にのつるほどもおくるまもつ

げなり。

○八月朔日（夕景四丁オ）

ゆたなるに。山里はあのさまはいとゆゑ〻しきに。空はくもりがちになりゆくに。空はくもりがちにもあるべきに。

○日いりがた（四七丁オ）

四わりて。山の端をぞ〻さてらすに。ひぐらしなきしきりてゆきはにおふるなでしこ。ちなびくなる。遠をれば。うしろ見ゆれば。前の前栽の花どもを。いとをかしうもてなしたる。水のこゑ。いとまぶしげやうおろ〻いきごとに。はてはひぐら

木深く。ゆくえわきさしなどせしてふぶくれば。寒さも時のまはりてかねうちあるべきよ。ただ色もなかるまを。ひとすじまあひくいとをくきこゆ。

○風いとをんばそうふけゆく。秋のいろぶかのねを。（四十七丁オ）

鹿の鳴ねも。滝はたをもひとつまぜれてをもむるほどあはれなるたぐひあり。あちこち夢人をもねぶめる。ぐきこゆれ。さをしかのうしをもさるのうつりぐ。月山のをちの地ほどをいあがこうをの氣なり。

○昔は山里より。（手習十九丁オ）

きぬぎのたをもおごやのなりけり

ざこも恵ある所の木ぞもたれまもるく前栽か
どもたのもくもゐをけくしうれはよりいけ
ば空れ〳〵こさまと衣かるをゝ門田いねのるを
所よつ事たるまのまねびしけ〳〵わのさ女ども
うゝうたひきよりじあつりひさしかれたと表
れのもくこゝあづまぢけとかども思ひ出〳〵れ
てゝのれ夕ぞりれ御息所のれをせ〳〵山里より登
今ぞこゝりて山さのるかけこる家なのしば松
のげちげく風れれをまいとんぼてきこゝつまゝ

興

とれこかひちをのうゝけゝいけとなくもあや
このなり尾君ぞ月かどあのさ釈も琴かど
ひきたるゝおゝ将のあるさみかどゝ人も琵琶
ひきかぞけゝあそぶ。

冬の部

初冬

夕貞 五十二丁オ

今日ぞ冬の来る日なりける。もゝちゝ
ぐれて空はれらーさっと気ゆりふぐめてし
ぐれもしく。

源氏君

すぐきにもまだふわの葉もふるにいゆく
さもゝぬ秋のくれのかし。

若紫四十九丁ウ

○上臈は木ぞとちぬのこのしたどはうさぬ
かれの前栽。色にのゆるやうにたもとろくて。

夢二十丁ウ

○もゝぐれからちして。それあちしなる雲はるの上。
か将は名。すび色はなほ。さーぬき。うす
らのにこゝろもぶへーてぎゝくあざやかにて。
ちぢのーきさきまーてまあり行ーうぎみ。
にはは冷まどはうらんみれ。うの上て霜枯
は前栽みるまゝほどかりうり。風あらかぬ。
もぐれぎとしたるほど洞きあゝうふこちち
して。雨とれ。ゝ。やかりのけん。今ぞ。
ずとおひのうごちて。ゆゝ洞ろつさ行ゝる。

雨さかりもとやかり
けんさ。劉柴。鶯が
ゆかりべー言ぞ。
まバ。器ゆり。

さるを。なにくれと。夏枯て。かくなる。ものは。
なしなどとも。うなんうしと。なめうしさうち
に。うちまそ。きたれ。ちのこはらめ。ごとき
ざ。もとびけ。ひうち。村みづ。ふれを。まくるとまる。ゐ
らひを。ぼうり。をとを。なる。紙ふ。
若菜上六十三丁オ
○みぞ。ぼうり。おさる。おそ。そ。ろくふ。ちんうふ。
紅葉は。の。ぼ。わ。ゆ。く。聖べは。ぼ。ろ。は。
めくぶ。みを。の。ふ。る。ふ。う。ふ。ぎ。ひ。あ。つ
ぼり。行。ふ。ふ。る。ぶ。霜。ぶ。ま。う。ふ。る。野は

らけ。ま。に。馬。東。は。き。の。ふ。ま。わ。ち。ぶ。く。ひ。ぶ
ぎ。ま。り。
同下十六丁ウ
○十月。ま。は。十。日。の。ま。ぎ。神。は。ぶ。ぶ。ま。ひ。ま。ぶ。ま。ま。
を。ぶ。の。ぼ。り。て。松。は。下。を。み。ち。ふ。ぶ。ま。ま。
み。は。を。ま。ま。ぶ。ま。ま。ま。ま。
時雨
葵世八丁オ
ぶ。り。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
は。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

ちけ。ぬ。ぶ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ぶ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

すこしひまあるうちにはるばるとうるほひわた
つるなり。

○初しぐれ（賢木 廿八ノ十オ）

おくぼしのふもとのしもより。

木枯（朧月夜君）

きりぎしのつゆ。侍

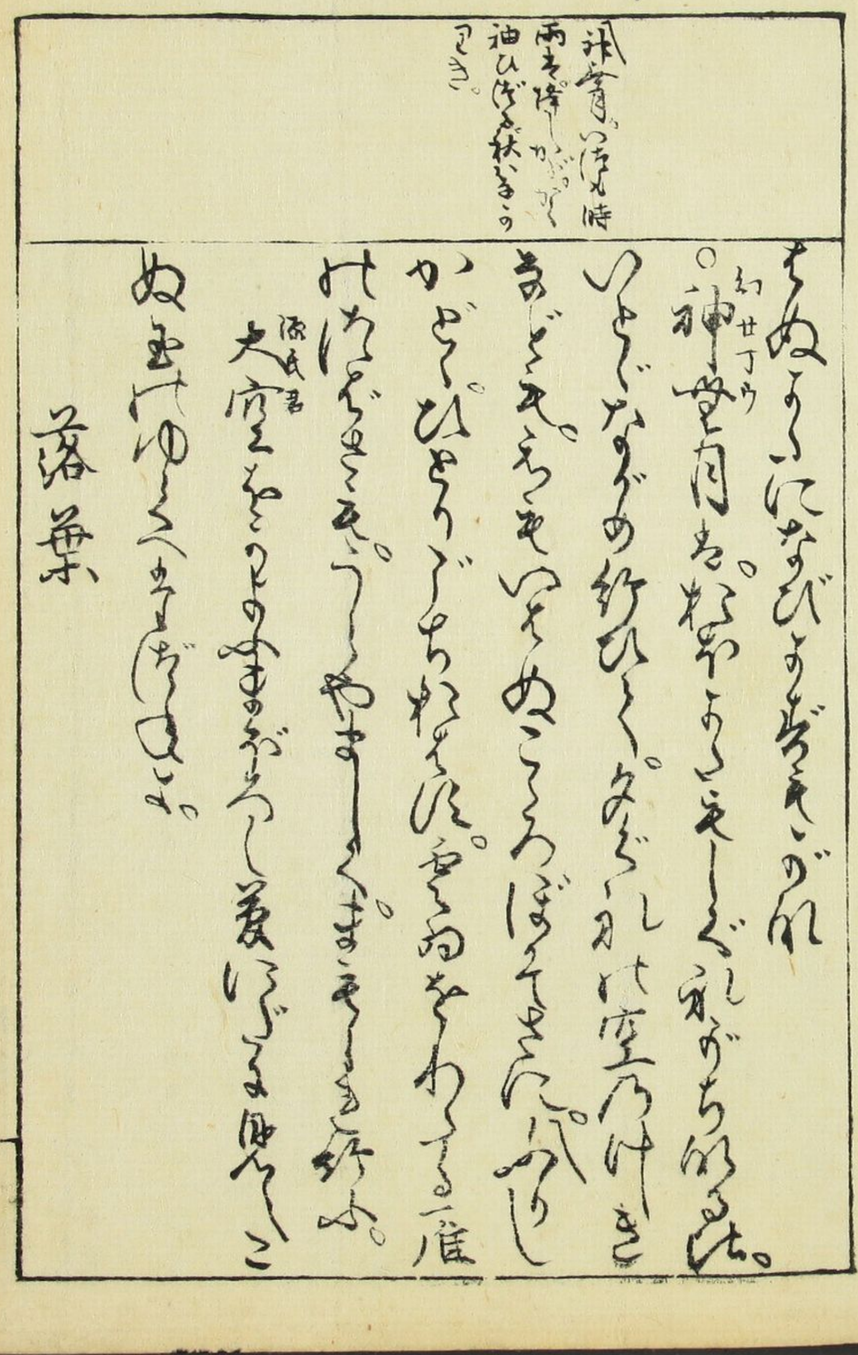
○時雨（夕霧 五十七ノ十オ）

まきのはのうへにはいかゝあらん。

落葉宮

のぼりて。

○廿八



きぬうちになびきたるけしき。

○神無月（幻 廿一ノ十ウ）

ものさびしくなりゆくまゝに。

ひとりなるの紛ひなくなりぬ。

ものどもそこはかとなくいとめづらしく。

かぜのおとにつれてはらはらとこぼれ

けるなどもいとあはれなり。

夕霧君

大空をとりのあまがけるかなしさ。

ぬれぬるかなゆくすゑのあはれこと

落葉

宿木七十二オ
○木がらしはげしく吹まどふ夕ぐれ
はらふる木ぎのもとなれば
ふみわけてゆくあとも見えぬを見わたし
くもりもなくつゆ
霜
若紫四十丁オ
いみじうきよらわらはなれば
をぢもうちはらはれたるに
うちぬぎたまへるを
若菜下十六丁ウ
○さしぬきばかりの

しろきよのけさとなるびねこもるなどのこゑ
○雪はのきくらしふるびねこもるなどのこゑ
（新撰八十九丁オ）
てせはしの人のすきまもとしつふかるまま
ちいの月和はくくもりなくさいづまとまは
すぐれ巻あげくく鬼のびもうひの音
はくのまはくくもまくくはくくだくくはくくだ
くくはくくもこのすくのかるもきくく
わくくはくくと空の月をもてよのは終るす
むぐきくのはなるはるはるはるはるはるはるはるはる

山寺代入れはよ
はは色どとにげはも
くくぬもきくぐ
くくはくくき。

天鄙玄鑑雲将晴
唯是西行不左遷

きぐくくみはくくはくくはくく

源氏男 いさゝうせきを落るわきまゝ入あん月は覚
るんこゝとも思ひ出るのしどひとりごちぬひく例
はまどろまれぬ暁はそゝるゞ千鳥いをあは
きにおく。

源氏男 友を島をゝろ〳〵見におく暁をひとりねざ
めは床をもはもそゞぎてさをするひをもか
なれぎ。ゝ思ひとりごちてすゝきま
へ見。

豊明節會

八月廿一日 節会といひく。世界ゝしはつとなく。
まあのしげるる時の大将敏はもゝ家上
し行ひくまゝるりまゝゝ行ひくく。
ふゝりいとゝたゝくさゝゝ御ゝ
頭弁将。蔭人が侍ふゝとゝくゝ。
見はもゝゝゝきゝ。きよびるあ見ゝくゝ。
ゝちゝぶきこゝてゝゝばきゝくゝ
まゝるゝ。

霰

雪あめ　雲ぬぐ　ちらに　ぬぐうさ　きのとうて　元〜

雪

未摘花　廿三丁ウ

いとどうらめかなるうきる雪のきえぬべう
ふりくる空はてにそこそこぬるとぬきあ
まてくぬぬをなづ消ぬる雪とそ
くるくるしく

口廿一丁オ

○かくうらて明めるくてをなまぬかし
辛ぬくうあぬ行ひくまて前載は雪を
見行ぬぬみあゆる沼をなくぬもを

口廿六丁ウ

あれわくくぬみくうきひぬるたぬ
つくくゆこのんをあるれるくく元〜
○御車よをるゆのくらくゆぬみよ
ろぬひくよあてくるるをぬくくを
ろぬこのくくるるれをのくくれと
気をさぬくくるのれまくくるよ松は雪は
あてこのぬるくくるうきる山里はてて
辛のくを気をくくるる元〜
口廿七丁ウ
○たくらくのきはくらくぬくくんん

[illegible]

[illegible]

[illegible]

まるに。

保氏君

さしわたる池はごみのさやけさのみるまに

この雪ぬぎぬ乃ぬぎ

まりわたのくしうそあるや。

○霜月ハ十ウ　部國志

くしうそ。

○八廿九十ウ　ホン

雪はげしくぬきくれたまひ給ふ。

○冬十四十ウ

○冬ふるくゝ雪ふりあれはさる法。雪はも

しきそ。とにに出ごくなどあるひくゝさんをひ

きすさび行ひくゝよりさに所ふるはせ。

大蒲　民ア大蒲　惟光ヒ　よりこぶ

てあるはまるてゐるどひきゐへるゝとこの

色どそもやゝ潤をのびひあり。

○霜月　生十六十ウ　ばりに成ぬしぬぞゆきあゝしぬがち

にくゝぼこのるきゆるすもあるを。朝日夕

日をみせぐぐもさぐぐしのぎにぐ。ふのう

ばりてぐ。白山おそひやらるゝ雪はう

ちこいでつるーを人ぶるなんてけまんく
なごめ行ふぶはうなきっとぶさこなぐ
さ丸んなきみわひこまぶごっこけるる
ひとさくゆくくぶるきらりぶまきみ
丁けうちもぶかすぶくくぶもる。

雪このきくしあけるあっぶこ
ゆくさ紀のことのってぶもひけぶけても
いきくとみそっぢるいでおるぶそやぬ
をみぶはのこはうぶみやってっきく

ぬどもけなよくぶるるもこくこくぶ
ねるやうぶどいのっぢうでなる
ゆぶかざうなきくんこもこかくくぶ
ちちくめと見ゆ行けるなみぶをかっぶ
ひくぶやうゆんん回おすいくおこの
なこのんどらくぶもうなけうぶ。

明石上
雪ふこのきここ山せるきとおぶぶとこなぼ
ふこのよくゆ行ゆきとこもこぶ
ゆこうちなきくくこ。

雪まぶきとのぎ山を弱まてもんぶきの
ふ沼たくしめやもさをしひぐさ。
○此雪ちこしくしくわつらうあり。（十六丁ウ）
○冬沼とのるこがんわざ風どもをすりてけうぐ（十七丁ウ）
ぐしきに沼まとどれがーあすりてみれ
えに例れちこのぢき家也行ふ雪うちし（源氏のし）
つくえんなるたうのれけるなたうーさほど
になるる御ぞどもをぢよくさきーあ行（オホン）
ひくぐろとるぐぐくしし行へまぢ。

いぐぐころわもんんくきいのぐわみし
ちう。
○ゆびちる御そどもなるぶいろあひのき（十一丁ウ）（オホン）
なりこれもくくなるくくくぐ雪れひう
にぐみぐくえんなる御ちぐうをぐ見ぐぐし（オホン 源氏君のし）
て。おくぐにすしかまちう行はぐ上ぐのびめんぐ（紫上ん）
おぐぐさる。
○雪れいぐちう沼ぐ行ぐりるうへぐぐえ（十九丁ウ）
ちひ沼ぐ松と行ぐのけぢめぐのーうみゆ

はなぐしなどよ。人は御ぶうるもこそ来まさるを見ゆ。晴〻にて（源氏君羽）まてこそ人はこゝろをうたすめる花をもみぢはさりよりこそ夜はけにめる月よ雪はひとりあひもとる空こゝぬやーうき色なるさをは身にしみて此世はほのはしとまぐ思ひなぐされ。

杉やーうさこそはこゝぬをりなき。すきすぐしたためよひおきこゝも人はこゝろあきよりこゝみすまるさめぐさを折ふ月

さくまなくさーぜひとはなる月てわたるこゝかもをしかもる前栽はのぬ。こゝろくるーうやり水をいとうもせびて池は水をそこもいとびすぐさてわくべ杉ゐ〻〻雪まるぐーせさ勢折ふ杉ゐしげるすぐ〻ぬーらはさどを月はもこゝ。はこはきやのはこなるしかもるぐさまぐのめこめみぐしかきぐ杉びーさぐなるさはるすこぐ〻ぬなのまめこゝぬるのさまるぐ

このみけ雪ふる。ふるさと庭まで。てきて
きゆ。きゆるぞ。ゆくさぶ。やのふりちひさ沈
ちわ。ちぐ。よろこびはしるあふぎ風
どこ。れ。ち。ぐ。ちをけ。ぐ。ぜ
なり。いとれ。ちまろばもさ。ふくつ
この。ど。ろ。れ。こと。のまでわぶり。
真木柱十三丁オ
○ふ。ぬま。ぎ。ぶ。を。ふ。ぬ。ふきたちて。
でぐ。ぶ。ぶ。ぶ。れ。ぶ。雪。ぶ。ぬ。ぬ。
四十五丁オ
○さ。ひ。ひ。ぶ。ぶ。ぶ。雪。ぶ。ぶ。ひ。ぶ

あり。粒いとあめんのあめ。さ。ひ。ぶ。ぶ。ぶ。
まあ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
四十六丁ウ
○日。ぶ。ぶ。ぶ。雪。ぶ。ぬ。ぶ。ぶ。ぶ。ん
ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
末葉上四十丁ウ
○又。ぶ。日。雪。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
四十四丁ウ
○ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。

子城陰處猶殘雪

る明ぐれかの空よ。雪はひとすりかんをてお
ぼつの形し。名殘まぐれまくるか沖ほ
ひやみもあめ分りさびとうごる。
○雪八丁四十四丁ウ
はのふとりぢめ見くわの形めほどな
るよなる殘まる雪とそのびやすみちち
ずさびあひたゝみのうしうちたるき新ふ
そひさしくうるとの形うけるなるひ
よ人ゝそそうねをしけやまもせなう

てひさあはけうう。
浮舟廿四丁オ
○雪ふるのたゝみ
ましぞ。所あうびとくやぬ。

綱代

橋姫廿九丁ウ
あづろ人さわづげうされど氷奥え
よゝぬまやあんずさまづるくを
ゆうと。所かゝそれ人ゝみやゝいあや
き舟どもよ。紫のうたてれひくなるさし
きせいとなうどもしてしうまどもよ。

はるのなごき水けぶくのびまさる。（薄氷のこと）
ねをくべぶ。ねをくべぶ。
なり。わまをうつ。
げんき身をぬ。
りんぶる。

鷹狩

（廿幸三丁オ）
雪をぶいさ。ゆうちく。道けをさ。
むるよ。みとたち上達ロなど。鷹ま。
げひまつるをめ。げ。ひまつるけ。（陸）

（冬ぶの。ぶ。ぶの。
なりけ。ちりくれぶ。
ぶ。）

ひぶ。ぶをまうけ。（諸本）ぶけ。鷹。何ぶ。元ま。
ゆ。ぶ。ぶをめなり。ぶり。衣をみぶ。
ぶ。ぶ。ぶ。ぶとなり。ぶ。

冬梅

（若菜下百五十オ）
雪ぶ。ぶいさ。ゆちるよ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
うめのぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
みぶり。

冬雜

（未摘花二十七十ウ）
注 ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。

まぎれかぎれもづのうちづま出るもかぎ
きれのごとくみだれ出るもすめ
にやうまごころやぶるるかぎさま
女はこぬを雪ふるあひくすみはどひきも
しとおもへる家をとうてあやまきもの
火をうでばのうへいかに袖ぐみまも
あがるもこのどもあはやねぶりて
ひきたすくるをとこなこひとこも
はれ人よりてぞあはれなる。

○雪（源世二丁ウ）みだれのさまみだれあるもいとこと
やはれ沖ありさまなるのあたるもの
むとおもひやりあるのなるのあたるもの
てまつまを行てあり。おもひ（ケヤ）合はせるといふ師
らむぞかむ。

（源氏巻）
みだれひまもなき雪なるなさ人はあ
まのうちのくもやぞのかぎりそはいろ
はけうみのくもはきをかいまり。

（椎本世一丁オ）
○雪あはれみだれのさまこと

うきあるものにわれなれば今ぞなぐ
れをひいつるたゝむやあまぶねのさゝ
竹ふ。

角総九十一丁オ
○まぐ松のうきほどけ雲はもとひいわ
さもげなるゑんゝゝゝあまこしてうま
れたときこゆ。

宿木七十二丁オ
○ふるとんゝきあるる深山木もやどり
きるる法
きれいろばまぐ松ゝりきるこたるなとす
ゝひきさゝを紅ひゝゝゝゝとわがゝて

ゝゝ物行ふ。

蓬君
やどり木さゝれもいてるぎきこれきろ
旅ゝまゝこいのみさゝじゝのゝ。

紫文叢禅　二卷畢